



モラロジーがめざす慈悲心は「相手」や「負担」などの条件を超えた公平な心づかいです。

払ったサマリア人のように、相手を問わず、深く愛するように説いています。

このような「相手を選ばない・犠牲を厭わない」慈悲心の実現が容易でないことは、敵国兵をも看護したナイチンゲールや、生命の危険を顧みずにユダヤ人を救助した杉原千畝の偉業が、時代や文化を超えて称えられることから明らかです。そうした偉業は簡単に真似ることはできませんが、彼らが私たちと同じ人間であることには励まされます。また、私たちの周囲にも目標となりうる「慈悲深い人」がいるものです。

慈悲心を発揮するのが難しい理由は、人間の感情の働きにあります。困っている相手が、家族や仲間のように自分に近いほど「かわいそう」という同情心が強くなりますが、知らない人や嫌いな人であれば、「面倒だ」「もったいない」などの負担に関する感覚が強くなります。

この感情の働きは自己中心性の一部ですが、普段は意識されません。感情の影響に気をつけながら、思いやりの範囲や程度をできるだけ広げることが、慈悲心を発揮する一歩となるでしょう。

モラロジー研究所の概論講座で使用される改訂『テキスト モラロジー概論』について、今月はモラロジーで重要視する「慈悲心」を図解します。



モラロジーを楽しく、平易に学びたい——。そんな要望にお応えして、この連載では改訂『テキスト モラロジー概論』の内容を図で解説します。ご自身の学習に、あるいは勉強会の資料としてご活用ください。

構成＝「れいろう」編集部

「思いやり」から「慈悲心」へ

——より広く、より深い心をめざす

柏生涯学習センター研修企画担当 望月文明

私たちは日常生活の中で、他者を思いやったり、他者から優しくしてもらうことがあります。これらの経験とモラロジーという「慈悲心」とは、何が違うのでしょうか。

「思いやり」や「優しさ」は日常的に行われていますが、それらにはいくつかの条件が伴うことも、誰もが認めることでしよう。「相手が誰なのか」や「実践にかかる負担」などの条件は、思いやりや優しさの判断と実践に大きく影響します。知らない人や意見の対立する人に対し、家族や友人と同じように優しく接するのは、簡単なことではありません。

また、思いやりの実践には、落とし物を拾うという些細なことから、溺れている人を助けるといった危険を伴うものまでさまざまな種類があり、負担が大きくなるほど、実践は困難になります。

諸聖人の「慈悲心」は、このような相手や負担などの条件を超えて、あらゆる人のために犠牲を払う、公平な心です。例えば、新約聖書の「善きサマリア人の喩え」では、イエスは、自分とは別集団に所属するケガ人を助けるために犠牲を